この平行世界の爆裂娘に祝福を！

大夏由貴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウィズの店でとある神器を見つけたカズマ達。

その神器により、一人の女性がこの世界に呼び出されてしまう。

その女性はなんと平行世界のめぐみんだった!?

ＷＥＢ版めぐみんの小説とかイラストって全然無いなー。

←

無いなら作ればいいじゃない。

ってなノリで衝動的に書きました。Ｗｅｂみんが書籍版の世界にやって来たという設定です。反省はしていない。

この小説には以下の要素が含まれています。

・ＷＥＢ版のエピローグ後、カズマとめぐみんが結婚している

・視点がコロコロ変わる

・あやふや設定

・気分で更新

他にも色々問題あるかもしれないけどそれでもいいよという人はどうぞご覧下さい。感想待ってます。

目　次

この唐突な召喚に祝福を！ ―― 1
このいずれ辿る爆焔に戦慄を！ ―― 17
この苦労性の女神に難題を！ ―― 30
この始まりの日に終止符を！ ―― 44

この唐突な召喚に祝福を！

今日はとても良い日だった。
なにせ彼と一日中ずっと一緒に過ごせたのだから。
彼が魔王を倒しておよそ半年の時がたった。
その長くも短い時の中、ついに私は彼と結ばれる事となった。
当時の私は余りの感動でつい涙を流してしまったのを覚えている。
彼の特別になるという事実は私にとってとても幸せな事だった。
・・・まあ一ヶ月も経たずに真剣な顔で「この世界では一夫多妻ってアリなのか？」と聞かれた時は流石にはっ倒したが。
ずっと前から知っていた事だが当時も、そして今も変わらずあの男はチョロい。
どうせ街で知り合いの女性から告白っぽいものでもされたのだろう。
・・・実際に一夫多妻をされてもなんだかんだ言って最終的に許してしまいそうな自分も自分だが。私を正妻にするなら、とか言って。
まあそれはともかく、結婚したとはいえ私達の日課がなくなった訳ではないし、仲間の二人と会わなくなったという訳でもない。
いつも通り四人で冒険する事がほとんどだ。
しかし今日は仲間の二人は用事が出来てしばらく帰って来ないと言う。
そういう事で折角の二人きりなのでいつも以上に彼に甘えた。
朝起きて、朝食を一緒に食べて、クエストに行って、日課をこなして、報酬を貰い、家でダラダラ過ごす。
食事の時も風呂の時も睡眠の時もずっと彼にくっついていた。
彼は照れ臭そうに、でも「しょうがねぇな」と言って一緒に居てくれる。
ああ、今日も幸せだ。そしてきっと明日も幸福なのだろうと確信している。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「ねえめぐみん、これを先に見つけたのは私なの。つまり私が発見しなければこれは誰も見つけられず、これを手にする事も出来なかったと思わない?つまりこれって私の功績じゃない?ならこれの所有権は私にあるべきじゃないかしら。」
「いえいえ、確かにこれを見つけたのはアクアかもしれませんけどこれは私が先に手に取ったんです。こういうのって早い者勝ちだと思いませんか?店の商品は先に手に取った人の物だと昔から決まっています。」
「まあ待て。こんな小競り合いをしていたって何の意味も無い。ここは皆が落ち着くまで私が預かっていくというのはどうだ?今のままだと平行線だし、中々悪くない提案だと思うのだが。」
「おいこらお前らいい加減にしろ。それを買う為に出費すんの誰だと思ってんだ。今現在ここにいるメンバーで財布握っているの俺だけだからな?店の商品はその商品を買った奴の物だ。つまりどの道それの所有権は俺にある。」
「あ、あの・・・お店の中で暴れるのだけは勘弁して下さいね・・・?」

今、俺達はウィズの店に来ている。
そこで何か便利なマジックアイテムは無いかと店の商品を物色していたのだが、そこでアクアが見つけたのがなんと俺より前にやって来たチート持ちが持っていたらしい神器であった。
アクアも神器の力を感じるらしいから本物だろう。
ウィズによると所謂召喚アイテムの一種らしく、魔力を注ぎ込むと発動するらしい。
なんでも魔力を注げば注ぐ程、自分が望む優秀な使い魔などが召喚されるんだとか。
見た目は少し大きめの絨毯に魔法陣が描かれているシンプルな感じだ。

しかし神器となればエリス様に見せればもう少し何か分かるかもしれない、という事でついでに買って帰ろうとしたのだが・・・。
「これを使えばきっと私が何もしなくても私の為に働いてくれる完璧な使い魔を召喚できるわ！しかもこの私の神聖な魔力なんだからその気になればきっと魔王なんかよりも凄い使い魔だって呼べること間違い無しよ！だから私にこれを渡して！」
「いいえ！これがあれば爆裂魔法をより強化してくれる魔法を使ってくれる使い魔だって呼べます！爆裂魔法を一日二発以上撃てるのも不可能ではありません！こんな便利な物絶対に手放しません！」
「こちらこそ譲れない！これはつまり私が好きな時にカズマのような、いやそれ以上の鬼畜な使い魔を呼び出せるという事だろう!?そのような話を聞いて引き下がれる訳が無いだろう！」
「ふざけんな！こいつさえあれば俺がいなくてもお前らを止められる使い魔が呼べるんだよ！こちとらお前らの暴走を止めるだけで毎回胃が痛くなってくんだよ！そろそろストレスで倒れるわ！」
・・・こんな感じでアクア、めぐみん、ダクネス、俺の四人の誰が所有権を持つべきかという話でヒートアップ。各々が神器の端を両手で掴んで離さない。
アクアは自分に従う完璧な従者を。
めぐみんは爆裂魔法の補助役を。
ダクネスはいつでも自分を苛めてくれる鬼畜を。
そして俺はこの馬鹿共を大人しくさせる使い魔を。
望む使い魔の為に全員が決して渡すものかとばかりに必死に食らい付く。
何故ならこの神器、一度所有者が決まればその所有者のみしか召喚出来ないという。
当然こいつらの誰かが所有者になってしまえば俺が望むこいつらのストッパーなど絶対に召喚されないだろう。
この戦い、絶対に負ける訳にはいかない・・・！
「こんのぉお！こうなったら強行手段よ！」
と、この硬直状態の最中、アクアがとんでもない暴挙に出た。

なんと神器に自分の魔力を注ぎ初めたのだ。
「ああ!?こんのアマやりやがったなオイ!!」
「ア、アクア！いきなりは卑怯だぞ！」
「ちょ、大人気ないと思わないのですか！」
俺達三人の非難の声にしかし開き直った駄女神が逆切れをおこす。
「うるさいわね！大体早い者勝ちって言ったのはめぐみんじゃない！だったら私のこの行動は全く悪くないわ！」
こ、こいつ調子に乗りやがって・・・！
「そっちがその気なら私にだって考えがありますよ・・・！」
「私にだって譲れないものがある！ここは引けん！」
「上等だ！絶対に泣かせてやる！」
俺達も遅れながらも全力で魔力を注ぎ込む。
だがこのままでは不味い。この中でＭＰ総量が一番多いのはアクアだ。馬鹿正直に張り合えば間違い無く競り負ける・・・！
ならば・・・!!
「ドレインタッチィイイイ!!」
アクアから魔力を吸いとる!!
「ギァアアア!?アンタなんてことすんのよ！この私の神聖なる魔力を勝手に吸いとるなんて！」
「何でもありの勝負で俺に挑むなんて百年早いわ！この駄女神！」
「ヒキニートの癖に生意気よ！いいわ！それなら女神の本気を見せてあげる！」
アクアは俺に魔力を吸われながらも構わず神器に魔力を注ぎ込む。
くっそ！ステータスカンストは伊達ではないか！
明らかに注ぎ込む量が少なくなったがこのままいっても競り負ける可能性が高い。そもそもめぐみんはともかく俺とダクネスの魔力ステータスは決して高くない。残念だがどう頑張っても俺とダクネスでは所有権を取る事は出来ないだろう。
ならばこのままアクアに神器の所有権を譲り渡すか？否！そんな結果になる位なら・・・！
「受け取れぇぇぇぇ！めぐみぃいいいん!!」

この中で一番勝率があり、尚且つ必死に頼み込めばある程度自重してくれそうなめぐみんにアクアから現在進行形で奪い続けている魔力を渡す！
「ひゃああ!?ちょ、いきなり首を掴まないで下さいよ！ビックリするじゃないですか！ですが感謝しますよカズマ！これならいけます！」
「あああああ!?ちょっとそれはズルいわよ!?この卑怯者ー！」
「先に暴走したのはお前だろうが！悪いがこれで・・・！」

ボフンッ!!

・・・ボフン？
妙な音の発生源を見ると神器から黒い煙がプスプスと音をたてながら出ている。
・・・え、何これ。どうなったの？
「もしかして壊れてしまったのか？」
「何言ってるの、仮にも神器よ？魔力を注ぎ込み過ぎて壊れるなんてありえないわ。」
「いや、じゃあこれどうしたんだよ。」
「一応まだ魔力は吸っているみたいですが・・・。」
と、俺達が困惑していると・・・。

［所有者ヲ正シク認識出来マセンデシタ。リセットヲ行ウタメ、注ガレタ魔力ヲ全テ使イ、魔力ニ関係ノアルモノヲ召喚イタシマス。］

・・・神器が機械的な音を発した。
「「「・・・へ？」」」
全員が呆けた声を出すのと同時に、神器の魔法陣が輝き出した。
カッ!!
「うおおお!?な、なんだ!?」
「え、えーっと。多分神器の暴走じゃないかしら？なんかそんな声聞こえたし・・・。」

「多分っつーか絶対暴走だろこれ！おいこれ大丈夫なのか!?」
「と、とりあえずここから離れませんか!?何やらヤバげな雰囲気がプンプンするんですが！」
「わ、私はここに残るぞ！店に被害を出す訳にはいかないからな、うん！念のため爆発でもして危ないかもしれないから抱え込むとしようか！」
「お前はこういう時くらい自重しろ変態！くそっ！さっきなんて言った？魔力に関係あるものを召喚？」
それってどういう事だ？注がれた魔力って俺達の魔力だよな？つまりそれって・・・。
「んーと、多分ね？私達の魔力に関係ある何かがランダムで召喚されるって事だと思うの。なんかさっきから凄い量の魔力が消費されているみたいだから、とんでもないのが出るかもしれないわ！」
「随分とあやふやな説明だなおい。・・・ちなみにどれくらいとんでもない？」
「んーと・・・そうね、多分冬将軍四、五体分と同じくらいかしら？」
「うおおおい!?どうにかならないのかそれ!?」
「無理に決まっているでしょ！もう効果が発動しているのよ！今無理に止めたらそれこそ何が起こるか分からないわよ！」
ふっざけんなよ!?こんなところで冬将軍レベルの魔物がポンポン出たら大惨事だぞ!?頼むから無害なものが召喚されてくれええええ!!

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふう・・・。さっぱりしました。」
朝早くに目が覚めた私はとりあえず先に風呂に入る事にした。
風呂から上がり、体を拭く為に脱衣所に向かう。
最近朝風呂になる事が多くなったような気がする。いやまあ、原因

は分かっているのだ。間違い無く彼と一緒に寝たからだろう。そういう時はほぼ確実に夜明け近くまでハッスルする事になる。ステータスそんなに高くない筈なのにどうしてあんなに体力があるのだろうか。しかもこちらが先にヘバってしまったらウィズの店で売ってる体力を回復するが一切動く事が出来なくなるポーションなどを使って無理矢理にでも回復させるあたり鬼畜だ。おかげで中盤辺りからは一方的にやられた。泣いて謝っても止めなかったあたり、本格的にＳっ気が出てきた気がする。

まあ要するに事後という事だ。おかげさまで毎度毎度朝風呂になる事が多い。

結婚してもう大分経ったというのに未だに落ち着く様子が見えない。

とまあそんなこんなで体を拭いている最中なのだが、今日は何やら朝から空気がおかしい。別に変な臭いがするとか、目に見える変化があるという訳ではないが違和感を感じる。

「・・・何なんでしょう、気味が悪いですね。」

ただ奇妙な事にこの空気には覚えがある。

このとびきりの不幸の前兆のような空気に。

いつの事だったか、確か・・・まだ駆け出しだった頃、アクセルで仲間達と出会ってしばらく経った時だったか？

・・・そう、そうだ。思い出した。

「確かデュラハンが攻めて来た時にアクアが起こした洪水の時と同じ魔力の昂りと危機感・・・」

ヴォオン・・・

「・・・ヴォオン？」

今、何か変な音が聞こえたような・・・

そう思考を巡らせた瞬間、私の周りに巨大な光輝く魔法陣が現れた。

「・・・はい？」

一目見ただけでも高度な魔法陣だ。陣の隅から隅へとまんべんなく行き渡る魔力は惚れ惚れする程無駄が無い。

・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

「いやいやいやなんですかこれ!?え、ちょ、待って下さいどういう事ですか!?」

慌てて魔法陣から出ようとし・・・見えない壁にぶつかった。

ちょ、出れない!?

「待って下さい待って下さい!!カ、カズマー!!ヘルプ、ヘルプです!!貴方の可愛いお嫁さんがピンチですよ!!何かよく分からないけどヤバイです！早く助けて下さいいいい!!」

寝室にいる筈の夫に救援を求めるが返事は無い。代わりに耳を澄ませればかすかにいびきが聞こえてくる。おのれあの甲斐性無し熟睡している！愛する者のピンチにくらい格好よく参上して下さいよ！

今度一回爆裂魔法を叩き込んでやると心に決めてどうするか考える。

というかあれだ。そもそも私は今全裸である。何故よりにもよってこんな時にこんな事が起こるのだろう。

とりあえずいつもの服を手に取り、着ようとしたところで体が急に浮き始めた。

不味い不味い不味い！経験上こういう訳の分からない事が起きた時は基本的にロクな事にならない！というか体が浮いてるせいで上手く服を着れない！

モタモタとしている内に体はどんどん地面から離れていき・・・魔法陣の光が強くなり、そこで私の意識は数秒の間途切れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
これは後で知った事だったが
どうやらこの時の召喚はかなりイレギュラーな召喚方法だったら
しい
アクアの女神としての力が異世界・・・というより平行世界への道
を繋ぎ
めぐみんの膨大な魔力が自身と縁のあるモノを探し当て
俺とダクネスの魔力がその縁を補強
その結果、こんな事態を引き起こしたのだとか
・・・何故、毎度毎度俺達はこういうトラブルに巻き込まれるのだ
ろうと深く思った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

カッ!!!
ズドォオン!!!

「うおおおおお!?」
「いやあああああ!?」
「のわあああああ!?」
「ああああ!!わ、私の店が・・・!!」
「皆、大丈夫だ!私が全て受け止めてみせる!」
こんな時でもブレない変態は置いといて。
神器が一際強く輝いたと思った瞬間、強い衝撃が地面から伝わり、
大量の煙が舞い上がった。それと同時に神器からの衝撃で思わず倒
れる。
その時の衝撃で店の商品が少し棚から落ち、ウィズが悲鳴を上げ
る。いやまあ悪かったとは思うけど今はちょっと勘弁してほしい。

煙は思ったより多く出ていて周りが全く見えない。さっきまで近くに居た三人も今の衝撃で壁際まで吹っ飛んだみたいだ。
「っ痛・・・!クッソ!いったい何が召喚された・・・!?」
台詞は途中で途切れた。何故ならすぐ側に人影が見えたからだ。
煙のせいで詳細な部分までは分からない。しかしシルエットからして女性のような体つきをしている。が、だからといって安全な奴とは決まらない。いい例がここに山ほどいる。
すぐに立ち上がり、距離を取ろうとしたところで煙が晴れていき、その人物と顔を合わせる事になる。

まず目に映ったのはまだあどけなさのある、けれど女性としての色気も仄かに漂わせる綺麗な顔。髪は長く、大きく見開いた瞳は紅く輝いている。恐らく急に違う場所に移動させられて驚いたのだろう。困惑と驚愕の感情が容易に読み取れる。
次にほっそりとした華奢な肩。さっきまで湯編みでもしていたのか、まだ微かに湿り気を残した体は実に扇情的だ。
どんどん視界を下に移動させれば胸元で服を両手で握っている。そのお陰で（残念ながら）ギリギリ局部が見えなくなっていた。よく見ると腰周りまでその長髪が続いている。

えーっと、つまり、アレだ。

俺の正面には、服を着ていない全裸の綺麗な女性が座り込んでいた。
・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
「きゃあああああああああああ!!!!!」

「すんませんでしたあああああ!!!!」
俺は、すぐさま土下座した。

・・・・・・・・・・・・・

数分後。
俺達は店の隅で顔を突き合わせ、緊急会議を行っていた。
「・・・なあ、どうするよ。俺こういう時の対応の仕方とか全然分からないんだけど。」
「私に聞かないでよ!だってこんな事になるなんて分かる訳ないじゃない!」
「というかそもそも呼び出すのは使い魔ではなかったんですか?彼女、どう見たって人間ですよ。」
「いや、たとえ人だろうと使い魔という枠から外れる、なんて事は無い。まあなんにしても今はまだそっとしておくべきだろうな・・・。」
そう言うダクネスの言葉に釣られ、チラッと店のカウンターに目を向ける。
「うう・・・何なんですか本当に・・・。いきなり公衆の面前で露出プレイってどういう事ですか・・・。」
俺達が召喚してしまった彼女はブツブツと文句を言いながらカウンターの裏で着替えていた。その台詞を耳にするだけで物凄く申し訳なく思う。
・・・大変眼福ではあったが。
それはともかくとしてこの状況は大変よろしくない。てっきり使い魔なんていうモンだから精霊やら魔獣やらが出てくると思っていたというのにどう考えてもどことも知らぬ土地に住んでいたであろう人間を召喚してしまったのだ。ぶっちゃけ誘拐と大差無い。
・・・いや、どことも知らぬ、という訳でもないか。
「なあ、あれってどう見ても紅魔族だよな?って事は紅魔の里からやって来たって事じゃないか?」
そうだとすれば余り大きな問題にはならないだろう。変わり者の

巣窟である紅魔の里だ。上手い具合に説明すればなんとかなるかもしれない。主に厨二病を刺激させて暴走させる感じで。
俺の問いにアクアが頷く。
「ええ。多分合ってると思うわ。出会いが急過ぎて名乗れなかったみたいだけどあの紅い瞳は紅魔族で間違い無いわ。」
「という事は彼女を紅魔の里に送り届ければ問題無いというところか。御両親にも謝罪をしておかないとな。」
なんとか方針が決まりそうだな、と思っていたのだが・・・
「・・・・・・・・・・・。」
「・・・?どうした?めぐみん。」
何やらめぐみんが困惑したような表情で黙っている。正直せっかく同郷の人物と出会ったのだからてっきり世間話でもしに行くと思っていたんだが・・・。
「いえ、そのですね・・・少しおかしいんです。」
「おかしい?」
正直紅魔族がおかしいのは当たり前だと思うのだが。
「・・・今何か失礼な事考えませんでしたか?」
「考えてないよー。」
「・・・まあいいでしょう。えっとですね、私、一応村の人達の顔は大体覚えているんですけど、あの人全く見覚え無いんですよ。」
「は?お前がか?」
めぐみんが知らないとは余程ではないか?こいつはこれでも紅魔族随一の天才と言われている。そのめぐみんが知らないとなれば相当影が薄かったか、それとも今まで一度も出会った事がなかったとかじゃないか?
と、ここで女性が顔だけカウンターから覗かせてポツリポツリと言葉を洩らす。
「・・・というかここウイズの店ですか?一体どうしてこんな所に・・・いや、それよりも少し聞きたいのですが。」
チラチラとこちらを伺いながら問いかけてくる女性。いやまて、今何やら聞き逃せない台詞を呟かなかったかこの人。

「・・・ウィズの店を知ってる？彼女は紅魔の里に住んでいたのではないのか？アクセルの住人でもない筈なのに何故・・・？」
ダクネスが俺達の疑問を代弁するように呟く。
そうだ。この女性が紅魔の里から召喚されたというならアクセルにひっそり建っているウィズの店なんて知ってる訳が無い。この時点で違和感を感じる。
だが俺はそれよりもこちらを覗く女性の顔に注目していた。
「・・・？」
・・・何故かその顔つきに既視感を感じる。何か、知っている誰かに似ているような・・・。誰だ？
「あの～・・・。」
「あっ、ああ。すまん、ちょっとボーッとしてた。」
いかんいかん。流石にいきなり顔をガン見するのは失礼だよな。
「で？聞きたい事って何だ？」
「はい、その・・・背、縮みましたか？」
「いやなんで初対面の人に背が縮んだかなんて言われんの俺？」
「・・・しょ、初対面？」
何やら驚愕の表情を浮かべる女性。続いてアクア、ダクネスを見て・・・めぐみんを視界に入れた瞬間に今度こそ固まった。
「お、おい、大丈夫か？」
「・・・あ、はい。大丈夫、大丈夫です。ええ大丈夫ですとも。」
なんとかフリーズ状態から抜け出した女性はしきりに大丈夫だと言い続ける。あ、ダメそうだなこれ。
「・・・え、ていう事はつまりこれってアレなんでしょうか。つまりはそういう事なんでしょうか。私は過去に・・・？いや、私が皆に会ったのはもっと大きくなった時ですし・・・。という事は・・・。」
その後も何やらブツブツ呟いていた女性だったが、何か結論が出たのか、よしっと呟くとカウンターから出てくる。丁度着替えも終わったようだ。

こうして見てみるとやはり紅魔族で間違い無いようだ。
気だるげな、とろんとした眠そうな紅い瞳、そして黒い髪。
黒マントに黒いローブ、黒いブーツを身に纏い、トンガリ帽子は被ってはいないものの、典型的な魔法使いの格好だった。
その姿を見て、やはりどこか既視感を感じる。
「念のため聞きますけど、皆さん私とは『初対面』ですよね？」
「お、おう。お前らも会っていないよな？」
「はい。初めて見ますよ。」
「ああ、残念だが見覚え無いな。」
「そうね、私も初対面よ。んー、けどなんで皆会っていないのにこの人が召喚されたのかしら。」
「・・・そうですか。では次に・・・待って下さい、今なんて？『召喚』？」
全員が初対面と聞き、少し寂しそうな顔をして・・・急にアクアの台詞に反応した。
あー、うん。まあ気になるよな普通。
「あー、なんつーかな。ちょっとしたマジックアイテムが暴走してな？その結果がこれというか・・・。」
「いや意味が分かりませんよ!?それがどうして私が呼ばれるなんて事になったんですか!?」
「そこが分からないんですよね。召喚されるのは私達に関係する何かだったというのに・・・。」
「そうだな。なんの接点も無い彼女が呼ばれる理由が分からない。」
「しかもあの魔力を全部使ったのよ？少なくとも冬将軍クラスの大物が出てきたっておかしくないわ。それこそ世界でも越えない限り。」
「・・・あー、いえ、そうですか。そういう事でしたか。納得しました。どういう状況かは薄々気付いていましたが原因も今ハッキリ分かりました。」
俺達が疑問の声をあげていると女性が額に手を当てて溜め息と共に聞き捨てならない台詞を吐く。
「え？何？もしかして何か分かったのか？」

「ええはい。何かというより全部分かりましたよ。どうしてこんな事態になってしまったのかが。」
　女性の台詞を聞いて驚愕の顔を浮かべる俺達。そりゃそうだ。なんせ一番混乱しているだろう女性が一番早く状況を理解したというのだから。
「・・・さて、ではいい加減自己紹介でもしますかね。呼び名も無いのでは困るでしょうし。」
「あー、いや、別に普通に名前を教えてくれるだけでいいんだけど。」
「何を言っているのですか！紅魔族たる者、自己紹介がただ名前を呟くだけなんてありえませんよ！カズマはもう少し常識を身に付けて下さい！」
「お前らに常識外れなんて言われたくねーよ！大体お前が常識を語るならまずはその爆裂欲をもう少し抑えてからにしろこの爆裂狂！」
　自己紹介をしようというところでめぐみんが口を挟む。こいつ本当に爆裂魔法以外に役立つスキルを覚えろとは言わないがもう少しその欲求をどうにかしてくれないかな。
「ふふっ。『こっち』でも変わりませんね、お互いに。では改めて名乗りましょう。」
「・・・？こっち？」
　何やら意味深な台詞を呟く女性。そして紅魔族独特の自己紹介を始める。

　―それは、かつて見た誰かの自己紹介にとてもよく似ていた。

「我が名はめぐみん！世界最強のアークウィザードにして、爆裂魔法を極めし者！」

　その、予想外すぎる自己紹介に俺達は一人の例外も無く固まった。
　そして、

「「「はあああああああ!!??」」」

これまた一人の例外も無く声を揃えて叫んでいた。

このいずれ辿る爆焔に戦慄を！

「『エクスプロージョン』！」
ドゴオオオオオン!!!!
いつもの昼下がり、今日も今日とてめぐみんの日課をこなしていく。
響く爆音、伝わる振動、全てがもう身体に染み付いている。今回の爆裂魔法はいつも以上に絶好調みたいだ。
「ふふ・・・カズマ、今のは何点貰えますか？今日の爆裂魔法は中々の出来だと思います・・・。」
「うーんそうだな、九十八点ってところかな。今日は随分調子がいいな。」
「当然でしょう。なにせ今回はいつもの日課と違うのですから」
そう、只今絶賛地面とベーゼをしているめぐみんの言う通り今日はいつもの日課とは少し違う。場所もいつもより遠い所にしている。
というのも今回は俺とめぐみんの二人だけではなく・・・
「ふむ、流石は私といった所ですね。『こっち』の私はこの歳でも十分強力な爆裂魔法を使えるみたいですし。四年分のキャリアがある身としては複雑な気持ちですが・・・。」
・・・大人めぐみんまで一緒について来たからだ。
薄々勘づいてはいたけどやっぱり大人めぐみんもこの日課を毎日やっているらしい。めぐみんも今の自分が違う世界の自分にどう評価されるのか気になったらしいので一緒に来てもらったのだ。
それにしてもこうして並ぶと顔つきが本当にめぐみんと瓜二つだ。寧ろ何故今まで気付かなかったのかが疑問だ。容姿は丁度めぐみんとゆいゆいさんの中間辺りに見える。
ちなみに何故俺と大して歳も変わらないこの人を『大人めぐみん』と仮称しているのかというとそれは今朝、ウィズの店で起きた事件まで遡る―

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ここは始まりの街、アクセルにひっそりと建っている魔法道具店。知る人ぞ知るウィズが経営している店だ。

そんな店の店内は今・・・

「め、めぐみん!?は、え?どういう事だ!?」

「え?めぐみんったらいつの間に分身を覚えたの?」

「何を言っているのですかアクア。私は爆裂魔法関係のスキル以外取るつもりは毛頭ありません。」

「い、いや!違うだろう!?突っ込む所はそこじゃないと思うんだが!?」

・・・ちょっとした混沌と化していた。

そしてその原因とも言える人物は今・・・

「ほう・・・『こっち』のウィズの髪は茶色いのですね。皆ほんの少しとはいえ色々違いがあって新鮮です。」

「ええっと、そんなにジロジロ見られると恥ずかしいのですが・・・。」

・・・ウィズを興味深そうに眺めていた。ウィズは間近で観察されて困ったように呟く。

今、この場にバニルが居なくて本当に良かった。正直これ以上場が乱れたら収集がつかない。

「待て待て待て、ちょっと待ってくれ。おい、めぐみん!お前生き別れの姉とかは居るのか!?ついお前の名前を騙っちゃう残念な感じの!」

「おい、誰が残念なのか聞こうじゃないか。」

格好いい（と思ってるらしい）ポーズを決めながら淡々と述べる女性、自称めぐみん。

いきなり自分はめぐみんだと言われたって納得出来る訳がなく、めぐみん（ロリ）に問いかける。めぐみん（仮）が何か言っているがスルーだ。

「おい、今私を見た瞬間に何を考えたのか聞こうじゃないか。」

「ああもう面倒くさいなお前ら！いちいち同じ台詞吐くなよややこしい！」

「「おい、誰が面倒なのか聞こうじゃないか。」」
「ハモんな！お前ら打ち合わせでもしてたのか！」
　畜生なんでこいつらこんなに息ピッタリなんだよ！ていうかめぐみん（ロリ）は適応早すぎだろ！
「まあさっきの質問に答えるなら、いませんよ。私に姉妹は妹だけです。姉なんて存在しません。」
「ええ、私の家は四人家族です。・・・まあ一人増えましたけど。」
「それなら一体どういう事だよ！他人の空似じゃないのか!?つーかなんで一番慌てる立場のお前がそんな落ち着いてんだ！」
「ふふふ、カズマ、これが所謂もう一人の私という事ですよ。これは我が心の闇が生み出したもう一つの人格・・・！」
「ああそうだったこいつはこういうヤツだった！」
　どうみても人格どころか肉体まであるけどな！ていうか全然話が進まん！
「まあ私はめぐみんといってもこの世界に存在するめぐみんではないんですけどね。」
　と、いい加減頭を抱えそうになった時、大人めぐみんが説明を始める。
「この世界？どういう事だ？」
　ダクネスが大人めぐみんに問いかける。
「いや、さっきアクアが言ってたじゃないですか。他の世界に繋げるだのなんだの。」
「ああ、確かに・・・って待て。てことはアンタは異世界から来たって事か？未来とかじゃなくて？」
「いえ、どっちかというと平行世界でしょうね。けど未来というのは当たらずとも遠からずって感じですね。私は『この世界の未来』ではなく『平行世界の未来』からやってきた、というのが正しいでしょう。」
「平行世界？なんでだ？」
「いえ、だって辻褄が合いませんし。」
「辻褄？」
「ええ。だって私がカズマ達と出会ったのは十七の時でしたから。」

「ああ、なる程。じゃあそっちの俺はめぐみんより年下なのか。」
「いえ、向こうのカズマは二十歳でした。ダクネスも二十二でしたし。アクアは・・・まあいいでしょう。」
「えっ、マジか!?」
「マジです。だからこっちのカズマを見た時驚きましたよ。カズマの方が年下になっているんですから。」
「ねえ、何で今私だけ外されたの？」
「ん？じゃあ今アンタ幾つなんだ？」
「・・・躊躇無く女性に歳を聞くなんて相変わらずブレませんね。・・・十八歳ですよ。」
「なる程、道理で大人っぽい訳だ。」
「な、なあカズマ。どうしてそんな簡単に信用出来るんだ？正直私はまだ半信半疑なのだが・・・。」
「ちょっと待って無視しないで。なんで今私だけ外されたの？」
一人で納得しているとダクネスが困惑した様子で聞いてきた。アクアが何か言っているが面倒臭いからスルーで。
まあ確かに別の世界からやってきたなんて頭のおかしい説明なぞ普通誰も信じないだろう。しかもよりにもよって紅魔族だ。ただの戯れ言の可能性がかなり高い。
だが俺は実際にそれを体験している。世界を移動するという事は有り得ない事ではないのだ。使用されたのが神器なのだから尚更。
それに実際その理由だったらアクアが言っていた程の膨大な魔力が消費されているのも納得出来るし、何よりこのめぐみん（仮）はめぐみん（ロリ）に似すぎている上に、俺達の事について詳し過ぎる、というより全く嘘を吐いている様には見えないのだ。
紅魔族はそういった設定を作ると大抵、
『フフフ、此処が彼の地とは異なる世界か…。そしてまずは挨拶といこうか。初めまして。この地の我が親愛なる仲間達よ。』
みたいな感じで話しかけてくるからなぁ…。
それに比べるとこのめぐみん（仮）は最初から素の状態で会話をしている。なんというか、『作ってない』のだ。

これで実は全部設定でしたなんて言われたらもうアークウィザードじゃなくて役者を名乗った方がいいと思う。
そんな感じの説明をしたらダクネスも納得したのか、なる程といった顔をする。
「確かにそうだな。それにまあ元々私達が強く言える立場ではないしな。」
「まあ勝手に呼び出したのこっちだからなぁ…。」
「全く・・・それで？私はどうやったら元の世界に戻れるんですか？」
めぐみん（仮）がそう言って・・・
「「「・・・・・・・・・。」」」
・・・俺達全員が顔を見合わせる。
当然だ。何せ俺達が使用した神器は使い魔を呼び出すという情報しか知らない。
「・・・ウィズ、ウィズ。この神器って使い魔を召喚する以外に何が出来るんの？」
「・・・ええっと・・・えっと・・・。・・・すみません、私はその情報しか知らなくて・・・。」
「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

・・・えっ。

「・・・あの、どういう事ですか、それ。えっと、つまり、その・・・帰れないと？」

どんどん不安そうな表情を浮かべ始めためぐみん（仮）。
そしてそれに比例するように冷や汗を流し始める俺達。
俺は出来るだけ明るい雰囲気を出そうと声を上げる。
「ま、まあともかく！状況は分かった事だし！もう少し情報交換でもしないか？」
「あの、ちょっと本当に怖いんですけど!?大丈夫なんですよね!?私ちゃんと帰れるんですよね!?」

「い、いや、こういうのは俺達みたいな一端の冒険者じゃなく、専門家に任せた方がいいと思うんだ。という訳でちょっと安楽死が出来て死後の世界に行ける方法知らないか？」
「もしかしてその専門家ってエリス様の事ですか!?あなたは私にいっぺん死ねと!?」
「いやまあ大丈夫だって！もし収穫が無くてもアクアに蘇生魔法かけて貰えばいいんだから。」
「嫌ですよそんな馬鹿みたいな理由で死ぬなんて！」
　激しく抵抗するめぐみん（仮）。正直これが一番手っ取り早い方法なんだが、まあそうだよな。俺だって嫌だ。
　と、そこでめぐみんが物珍しそうに大人めぐみんをジロジロ見つめる。
「しかしこれが十八歳の私ですか…。意外と私と違う所が多いですね。髪とか服とか。」
「そうだな。少なくともこの人の方がまともな魔法使いに見えるな。」
「おい、私のどの辺りがまともじゃないのか聞こうじゃないか。」
　めぐみんの抗議の声を聞き流してめぐみん（仮）の姿を見る。
　しかし確かにめぐみんの言う通り所々違う姿をしている。
　めぐみんは黒いローブの上に黒マントを装着し、トンガリ帽子を被っている。それだけなら普通の魔法使いに見えるのだが、片足だけに包帯を巻き（只のファッション）両手に指ぬきグローブを着け（これも只のファッション）首にチョーカーを着け（これまた只のファッション）左目に眼帯を着けている（やっぱり只のファッション）お陰で厨二病全開のちょっと痛い格好をしている。
　それに比べてめぐみん（仮）は黒一色の格好で如何にも熟練のアークウィザードといった姿だ。
　それにめぐみんと違い、めぐみん（仮）は髪を腰の辺りまで伸ばしている。ぶっちゃけ俺のストライクゾーンど真ん中です。
　・・・つーかヤバい。なんか段々意識し始めた。なにこれ？めぐみんてこんな綺麗になんの？
「・・・？どうしました？カズマ？」

「い、いや、何でもない・・・ってちょっと近い近い近い！」
めぐみん（仮）がいきなりズイッと近づいて問いかけてくる。すいません、少し心臓に悪いです。
「お、おい！めぐみん・・・さん？カズマに少し近すぎないか？」
「？・・・ああ、すみません。ついいつもの癖で。」
「く、癖？」
成長しためぐみんをどう呼べばいいのか迷っているダクネスが注意をしたらめぐみん（仮）は今気付いたとでも言うように俺から離れる。
なんだ？めぐみんて人に近づく癖なんてあったっけか？
するとその台詞を聞いためぐみんがピタリと固まった。
そして数秒かけて何かに気付いたのか、めぐみん（仮）に信じられないとでも言いたそうな、けど何処か期待を含んだ目をしながら問いかける。
「あ・・・あの・・・少し聞きたいのですが・・・いつもカズマとはどういった事をしているのですか？」
それを聞いためぐみん（仮）はめぐみんの言いたい事を理解したのかニッコリ笑い・・・とんでもない爆弾を投下した。

「それは勿論一日中ずっとくっついていたり甘えたり甘えられたりですね。妻としては嬉しい限りです。」

「「「…………はい？」」」
今日、何回目か分からないフリーズ状態に陥りながら、
俺は今日からこの人を大人なめぐみん、略して大人めぐみんと呼ぶ事にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

―朝の事件を思い出しながら、俺はふと気付いた事を伝える。
「つーか今更だけどさ、俺流石に二人も背負える程体力無いぞ。ただでさえ遠出してんのに。」
「相変わらず低ステータスですね。もう少しレベルを上げたらどうですか？」
「おい、俺は別にこのままお前を置いて行っても構わないんだからな？」
こいつ人におぶって貰っておいていい度胸だな…。
「いえ、その辺は大丈夫です。問題ありません。」
「いや、大丈夫っても…」
「では少し待ってて下さいね。」
そう言って俺達より少し前に出て詠唱を始める大人めぐみん。
瞬間、俺もめぐみんも黙って見守る。
というより黙らざるを得なかった。
何故なら大人めぐみんが放つプレッシャーが尋常では無かったからだ。
ゴクリ、と唾を飲み込む音が聞こえる。それは俺から鳴った音なのかめぐみんから鳴った音なのか分からなかった。
やがて詠唱が終わり、大人めぐみんの右手にはソフトボール程の大きさの紅く輝く球体が出来上がった。
「それではいきます！見ておいて下さいね！もう一人の私よ！これがいずれ貴女が手に入れる力の一端です！」
大人めぐみんがそう言い放つと遠くに鎮座する巨大な岩に向けて右手を突き出した。
「『エクスプロージョン』ッ!!」
ドゴオォォォオオン!!!!
聞き慣れた、内臓まで響く爆音。そして肌を撫でる熱風。

それらを感じながら目の前の惨状を確かめると・・・
・・・そこにはめぐみんが作ったものより少し大きめのクレーターが出来上がっていた。
「あれっ!?・・・思っていた以上に威力が出ませんでしたね・・・。」
大人めぐみんが慌てたような声を出す。
それもそのはず。あれだけの啖呵をきってめぐみんより少し威力の高い程度の爆裂魔法を見せる事になってしまったのだ。大人めぐみんにとってこれはいただけないだろう。
一方俺はというと・・・

ゾクリ、と鳥肌が立っていた。

確かに結果は微妙と言う他ないだろう。なにせ出来たクレーターの大きさは大した違いは無く、めぐみんがちょっとレベルを上げればすぐに追いつける程度の差だ。
しかし。俺はこの瞬間まで、どう考えても大人めぐみんよりめぐみんの爆裂魔法の方が強いと確信していた。
何故なら大人めぐみんは今、何も持っていない。
そう、何も持っていないのだ。
つまり、

大人めぐみんはマナタイト製の杖を持っているめぐみんの爆裂魔法を、なんの武器も持たずに凌駕したのだ。

俺は正直、杖を持っている状態と持っていない状態でどれ程の違いが出るのか詳しく知ってる訳じゃないが、それでも話を聞く限りでは魔法の威力の補正がかからない、制御が困難等、色々不便な事が多いのだとか。下手したら普段の威力の半分程度しか出せないなんて事もあるという。

以前アクセルにデストロイヤーがやって来た時もウィズがめぐみんと共に爆裂魔法を放ち、武器を持たないウィズに軍配が上がったが、あの時とは訳が違う。

まず単純にレベル差の問題だ。あの時ウィズとめぐみんには何十ものレベルの違いがあったが故にウィズが勝ったが、そもそもまだ十数程度のレベルのめぐみんが高レベルの、さらにはリッチーであるウィズに張り合える事自体が異常なのだ。

その上あの後アクアから魔力を渡され、ウィズの爆裂魔法を上回った事から考えてもあの時点でのめぐみんの爆裂魔法のスキルはとんでもない事が分かる。

しかしめぐみんはあの時とは違い、レベルも充分上がり、上級魔法習得の為に取っておいたスキルポイントも残らず威力上昇のスキルに注ぎ込んだ為、今やその威力は過去のものとは比べものにならない程になっている。

ウォルバクとの戦いの時には既にウィズの爆裂魔法を完全に上回ったとか言っていたしな。

それに俺がめぐみんの方が強いと思ったのは、例え相手が今より成長しためぐみんとはいえそこまでレベル差が開いているとは思えなかったというのもある。

この世界では弱ければ弱い程、才能が無ければ無い程レベルが上がりやすい。

それはつまり強ければ強い程、才能が有れば有る程レベルが上がりにくいという事だ。

今では立派な爆裂狂だがめぐみんは紅魔族の中でも類を見ない才能の持ち主だ。いくらめぐみんとはいえ今のレベルを更に何十も上げるにはとてつもない苦労と時間が必要だろう。それ故にここまで力量に差が出るとは思わなかった。

そして、何より爆裂魔法を放った後も大人めぐみんは倒れる事無くしっかり立っていた。

それはつまり魔力を全て使い果たす程爆裂魔法に魔力を込めていなかったという事だ。

少し視線をズラせばめぐみんも目を見開いている。恐らくめぐみんも大人めぐみんのレベルとスキルの高さに気付いたのだろう。その頬には冷や汗が流れている。

・・・そしてその瞳には爆裂魔法の力比べで負けた上に全力を出させる事が出来なかった悔しさと、この先自分が手に入れる事が出来る力に対する大きな期待が浮かんでいた。

全く、楽しそうな顔しやがって。

「さ、さて。ちょっと気まずい感じになってしまいましたがそろそろ帰りましょうか。」

大人めぐみんがそう言って帰る支度をする。といっても特に準備する事など無いが。

「おう、んじゃ帰るか。」

めぐみんを背負い、アクセルへと足を運ぶ。

と、そこで大人めぐみんから強い視線を感じた。

チラッと見ると結構近くでこっちをジーッと見つめてって近い近い近すぎ!!

「な、なんだ!?少々ビックリしたんだですけれども!?」

「っと、すみません。少し気になって。あと落ち着いて下さい。なんかおかしな口調になってますよ。」

スッと体を離す大人めぐみん。正直朝の爆弾発言のお陰で凄くドキドキするし無駄に期待してしまうから止めてほしいのだが。

と、そこで大人めぐみんが興味深そうに聞いてくる。

「あの、『こっち』の私はまだ最大魔力が消費魔力に追い付いていないのですか?」

「まだっつーか今後もずっと追い付く事は無いと思うぞ。こいつ今までのスキルポイントとか全部威力上昇とかに注ぎ込んでいるからな。これからもそうするつもりらしい。」

「え?本当ですか?あ、いえ、別に私的にはそれほどまでに爆裂魔法を愛している事にこれ以上無い程感心と納得をしていますが、これからも使う度に動けなくなると流石に危険ですよ?」

と、大人めぐみんが何やら妙な事を。

「・・・？何を言っているのですか？そういう時こそカズマのドレインタッチでしょう？」
「・・・？更に吸ってどうするんです？」
「え？」
「え？」
・・・・・・・・・・。
「よし、少し情報を整理しよう。」
なんかアレだ。俺達の間に認識のズレがある。
「ええと、すみません、『こっち』のドレインタッチってどんな効果なんですか？」
「えっと、相手の体力や魔力を吸いとったり、逆に分け与えたりする事が出来るスキルですね。」
「はい！？なんですかそれ！？便利過ぎじゃないですか！」
大人めぐみんが驚愕の声を上げる。そんなに便利なのか？『向こう』と比べてこっちのスキルって。
「え、ちなみに『そっち』のはどんな効果なんだ？」
「相手の体力と魔力を両方同時に吸いとるだけです。」
「うわぁ。」
思わずめぐみんと一緒に声を上げてしまった。確かにこの差は大きい。何せその効果では味方に使用してサポート、なんて使い方が出来ないのだ。どちらか片方だけ吸いとるなんて事も出来ないので余計に使い勝手が悪そうに感じる。
「はあ～、こういう細かい所も色々違うのですね。流石は別世界。」
「成る程、だから大人めぐみんは既に最大魔力を上げているのか。『そっち』じゃドレインタッチでの回復が出来ないから。」
「はい、本当に偶にですが戦闘等でダクネスが気を失う事もあったのでカズマの負担を減らす為にもこういった対処を取らざるを得なかったんです。」
「・・・おいめぐみん、お前も大人めぐみんを見習って・・・」
「嫌です。それは『向こう』の話でしょう。『こっち』のドレインタッチは受け渡しも出来るのですからいいじゃないですか。」

それに・・・と続けてめぐみんがギュッとしがみついてくる。
「・・・カズマにおぶって貰えるのは結構好きなんですよ？」
・・だから急にそういった事を囁くのは止めてほしい。期待しちゃうだろ。
と、そこで大人めぐみんが黙ってこちらを見ている事に気付いた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
「な、何だ？少し、いやかなり気になるんだけど。」
「いえ、少し羨ましかったので。・・あの、側に居てもいいですか？」
「お、おう？」
予想外の頼みについ何も考えずにそう言うと大人めぐみんが嬉しそうに寄ってくる。
どうしよう、なんか大人めぐみんが凄い可愛い。
え？何これ？なんかハーレム系主人公にでもなった気分なんですけど。やはり今の俺はモテ期なのか。そうなのか。
「・・うん、やっぱり違う世界とはいえ貴方の隣は居心地がいいです。」
そう言って安心したように俺に寄り添う大人めぐみん。
・・・どうしよう、『向こう』の世界の俺が物凄く羨ましく感じる。
というかもうめぐみんルートに入るしかないんじゃないかな。
二人のめぐみんにくっつかれ、俺は結構真剣に悩みながらアクセルへ帰還した。

この苦労性の女神に難題を！

「いやあ、それにしても話を聞けば聞くほどあっちの世界と色々違いますね。まさかこっちのカズマがそんなに早く囚人になっているなんて予想外です。というかなんですか国家転覆罪って。よくまあ助かりましたね、それ。」
「いやホントにな。正直牢屋にぶち込まれた時はどうやってこの世界から逃げ出すか本気で考えたからな俺。」
「やめて下さいよ、こっちの皆が悲しみます。もう一人の私とダクネスは特に。勿論私だって悲しみますよ。平行世界とはいえ自分の夫がいなくなるなんて。」
「お、おう。・・・あの、サラッとそういう発言するの本当に心臓に悪いんで事前にそういう雰囲気とか作ったり手紙とか送ってくれると助かります。」
「前半は兎も角、後半は相当頭悪い事言っている事に気付いているんでしょうかこの男。」
　大人めぐみんがこの世界にやってきて一日が経ち、今俺達はアクセルのとある喫茶店に居た。アクア達は屋敷に残ってもらった。この場に俺と大人めぐみん以外の人物が居ると面倒なのだ。
　その時にめぐみんが大人めぐみんと一悶着があったようだが、俺はどんな会話があったのかは知らない。だが最後にはお互いに友情を深めるように握手をしていたから問題は無いだろう。
　まあそれはそれとして、今は目の前でテーブルに突っ伏しているこの盗賊の姿をした少女から結果を聞かなければ。
「それで、どうだったんですか？エリス様。」
「あなた達はもう少し神様を敬って下さい!!私は便利屋ではないんですよ!?」
　その点は申し訳ないと思う。というかその姿でその口調になる辺り、本当に大変だったのだろう。
　何故こんな状況になったのかは昨日起こった召喚事件、その後の出来事まで遡る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ウィズの店から出た後、まず俺達は大人めぐみんをどうやって元の世界に帰す事が出来るのか、それぞれの伝手から情報を集めていた。
とはいえ元々異世界なんてものに詳しい人物なんて限られている。
そう、女神であるエリスだ。
死者の転生先の道案内をしてくれるエリスならこの問題もなんとか出来るかもしれない。
ちなみに一応元女神であるアクアは、
『はあ?このエリート女神である私が平行世界の調整や管理なんて面倒臭い上に地味な仕事をやる訳ないじゃない。そんなのは見習いの女神や天使のやる事よ。だから平行世界の移動方法なんて知らないわよ。』
なんて事ほざきやがった。相変わらずあの駄女神役に立たねえ。
なので俺はこの事をエリスに相談する為、クリスの元に行こうと思ったのだが・・・。
「なあ、別に屋敷で休んでてもいいんだぞ?とりあえずクリスから送り返す神器があるかどうかを聞くだけだし。」
「いえ、私もこの世界のアクセルや冒険者、一般知識などを知っておきたいので、折角なのでカズマについて行こうかと。それに私もクリスに少し用があるので。」
「そ、そうか。」
・・・なんか大人めぐみんまでついて来た。
正直エリスと二人だけの方が話がしやすいので悩んだのだが、実際に大人めぐみんを見せた方が説明も楽かと思い、同行を許したのだ。
しかし大人めぐみんがクリスに一体なんの用があるのだろう?そ

もそもこっちのクリスと大人めぐみんは面識が無い筈だし。
そんな事を思いながら俺達は冒険者ギルドに着いた。常にクリスが此処に居るとは限らないが、それでも居る可能性としては此処が一番高い。
そしてギルド内を見渡すと運良くクリスを発見した。どうやら少し遅めの朝食を食べているようだった。
「おーい、クリスー。ちょっといいかー?」
「ん?助手君じゃん。どうしたの一体。ていうかその人は?」
声をかけるとこっちを向き、隣の大人めぐみんを見て疑問符を浮かべる。
「実はちょっと話したい事があってな。此処じゃなんだし、前に行った事がある喫茶店に来てくれないか?」
「ああ、あそこの?それはいいけどどうしたの?何か相談事かな?」
「ああ、飛びきりの相談事だ。」
「?」
此処で話してもいいんだが、エリスと話をする為にも今無理に大人めぐみんの注目を集める状況は作りたくない。万が一ギルドの冒険者達にこの事が知られて騒ぎにでもなったら相談どころではなくなる。
クリスは疑問符を浮かべながらも俺達についてきてくれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・はああああああああ!?平行世界からめぐみんを呼び出したぁ!?何してんの君達!?」
「おいクリス、いくら人気が少ないと言っても全く人が居ない訳じゃないんだからもう少し静かにしてくれ。他のお客様に迷惑だろ。」
「あ、ごめん・・・って違う!!どうすんのさ!?平行世界に送り返す神器なんて聞いた事ないよ!?」

「うげ、マジか。出来れば神器を回収して送り返すのが一番良かったんだが。」
しかしまあこれは予想していた事だ。そうそう都合良くそんな神器があるとは思えないし。だからあまり期待はしていなかった。
・・・いや、ちょっとは期待はしていたけれども。
けれどこれで俺が思いつく方法はエリス様に丸投げ大作戦しかなくなった。
それをクリスに伝えようと思うが、大人めぐみんが同席している中でエリスと話をするのは少し面倒だ。
とりあえず大人めぐみんの用とやらを済まして早めに屋敷に戻ってもらおうと思っていたら、大人めぐみんがクリスに話しかける。
「まあそんな都合良く事が運ぶなんて思っていませんよ。そこでもう一つ聞きたいのですが。」
「う、うん。何かな？」
と、大人めぐみんが周囲を見回し、人が居ない事を確認してから続ける。
「・・・貴女が私を元の世界に戻す事は出来ますか？エリス様。」
大人めぐみんはそう言って―

おい、今この人なんつった？

俺も、そして当然クリスも硬直する。なにせクリスの正体を看破されたのだ。ちょっとこれは予想外にも程がある。
だが、よくよく考えれば有り得ない事ではない。大人めぐみんは平行世界からやってきたのだ。向こうでは他のメンバーがエリスの正体を知っているのだとしても不思議ではない。
クリスもその事に気付いたようだが、念には念を入れ、大人めぐみんに質問をする。
「・・・ちなみにどこまで知っているの？」

「神様についてはクリスがエリス様だって事、そしてアクアが本物の女神だという事でしょうか。」
「そっか・・・それなら話してもいいでしょう。」
深い溜め息を吐いて、クリス・・・いや、エリスが話し始める。
「・・・本当に困りましたね。確かに貴女を元の世界に戻す事自体は不可能ではありません。ですがそれは天界規定に引っかかるんです。『平行世界のモノを別の平行世界に移す事無かれ』。・・・本来なら平行世界に干渉する事なんて無理なんです。人の身ではそんな力を持つ事なんて出来ないし、神格を持っていても天界規定により手出し出来ない。今回めぐみんさんが召喚されたのは本当にイレギュラー中のイレギュラー。アクア先輩が規定を無視して無理矢理女神の力を使用したからこそ起きた事件なんです。」
・・つまり結局あの駄女神が原因という事か。あんにゃろう、帰ったらあいつが大事にとっておいた高級酒全部飲んでやる。
「言っておきますけどめぐみんさんが召喚されたのはカズマさん達が全力で魔力を込めたからですからね？原因はアクア先輩ですが、そもそもそれ程の魔力を込めなければ神器の暴走なんて起きなかったんですから。」
「すいません。反省してます。」
いや、けどあれは仕方ないと思うんです。だってあのまま放っておいたら間違い無くあの駄女神がさらに駄目になるので。
「それで・・・どうにかなりませんか？流石にこのままだと大人めぐみんも困りますし・・・。」
「うーん・・・ですがこれは・・・。」
だがどうしたものか、思っていた以上に難色を示している。正直この頼みを断られたらもう俺に出来る事は無い。そして俺が考える限りこれが最も確実で安全な方法だ。それが駄目となるともう本当に新しい神器が出てくるまで待つしかない。
俺が説得を続けようとした時、大人めぐみんが頭を下げた。
「自分が凄く難しい事を頼んでいるのは分かります。けど、どうかお願いできないでしょうか。私は、まだ向こうでやり残した事が沢山あ

るんです。」
「めぐみんさん・・・。」
　大人めぐみんが頭を下げたまま、必死に説得を続ける。
「まだ、ゆんゆんと決着がついていません。まだ、アクアに宴会芸を全部見せてもらう約束を果たしていません。まだ、ダクネスに食べられる食材やその調理方法を全部教えていません。まだ、カズマの子供を産んでません。」
　それに・・・と続けて、顔を上げる大人めぐみん。
「・・・まだ、私は満足してません！まだ、皆と一緒に私は幸せに生きたいです！」
　―その顔は、たとえ断られても絶対に諦めてたまるかとでも言わんばかりに、不敵な笑みを浮かべていた。
　その大人めぐみんの顔を見て、呆然としていたエリスだったが、しばらくするとハア・・・と溜め息を吐きながらも微笑みを浮かべる。
「全く・・・こんな事はこれっきりにして下さいよ？」
「!!じゃあ・・・！」
「最近は天界規定を破ってばっかりですね。私、これでも真面目な優等生と上の人達に通っているんですが。」
　その言葉を聞いて顔を輝かせる大人めぐみん。なんとか上手く事が運び、俺も深い溜め息を吐き出す。
　あー、ドッと疲れた・・・。つーか結局俺何もしていないな。説得したの全部大人めぐみんじゃん。
「ですが今回は流石に大事です。正直平行世界への道をコッソリ繋げるだけでも最低六日・・・いえ、一週間は掛かると思って下さい。」
「そんなに掛かるもんなんですか？呼んだ時は一瞬だったのでもう少し早く済むと思っていたんですが・・・。」
「無茶を言わないで下さい。これ以上急ぐとバレる可能性が大きいです。そうなって怒られるのは私なんですからね？」
　俺の疑問に答えながらジトッとした目で見つめてくるエリス。まあ流石にこれ以上迷惑をかける訳にもいかないからここは納得しておくか。一番大事な所はなんとかなったんだし。

話は終わったので、このまま屋敷に帰ろうと席を立ち・・・。
「エリス様、その一週間とは貴女一人で繋げる作業に取りかかった場合ですか？」
「・・・？はい、そうですが・・・？」
大人めぐみんの急な質問に戸惑いながらも答えるエリス。
俺も大人めぐみんが何を言いたいのか分からずに動けないでいる。
「誰かに協力してもっと時間を短縮出来たりは・・・。」
「それは出来ません。今回の事が誰かにバレる訳にはいきませんから。・・・というか言っておきますけど、これって天界ではほとんど犯罪みたいなものなんですからね？」
「そうですか・・・。出来ればあっちの皆に心配かけたくはなかったのですが、仕方ないですね。」
少し落ち込んだ様子を見せる大人めぐみん。確かに、説明も無く大人めぐみんはいきなりこっちの世界に呼び出されたのだから、向こうでは大騒ぎになっているだろう。それをどうにかしたいと思うあたり、仲間思いのめぐみんらしい。
しかし流石にこれ以上の成果を出すのは無理だろう。そんな方法、あるなら教えて欲しい・・・。

・・・待てよ？

「あの、エリス様。つまりエリス様以外の人達にバレなければいいんですよね？」
「え、ええ。そうですけど・・・。」
「一人でやるより二人でやった方が効率が良いと思いませんか？」
「・・・あの、カズマさん、もしかして・・・。」
「向こうのエリス様にも道繋ぎを手伝って貰おうかと思いまして。」
「貴方は向こうの私にも規定破りをさせるつもりですか!?あの、いくら自分自身とはいえ巻き込むのはちょっと・・・。」
「エリス様、俺ってエリス様に神器集めとか色々協力していますよね。いや、別に深い意味は無いんですけどね？けどやっぱりああいう仕

事って報酬とかも明確にあるとやる気って出るんですよねー。いや、深い意味は無いですよ？でもそう考えると俺ってそういう報酬ってあんまり貰っていないよーな気がするんですよねー。深い意味はありませんが、これって借りとかになりますかね？」
「ああもう！分かりました、分かりましたから！やりますよ!!ついでに今の状況を向こうの皆さんに伝えるように向こうの私に頼んでおきます！」
「本当ですか!?ありがとうございます!!」
　白々しい・・・と呟きながら睨んでくるエリス。悪いとは思うけど、やっぱり大人めぐみんにも手を貸してあげたいからな。少しは役に立ちたいし。
　だが言質をとれて良かった。正直何度も生き返っている事を見逃してもらっている事を引き合いに出されたらキツかった。
　という訳で、エリスになんとか約束を取り付ける事が出来、大人めぐみんが元の世界に帰れる目処が立った。
　すぐに準備に取りかかるので天界に戻ると告げて俺達と別れるエリス。明日、この時間にまた喫茶店に来てくれとも言っていた。
　エリスと別れ、喫茶店を出てから屋敷に帰る途中、大人めぐみんがポツリと呟いた。
「・・・あの、ありがとうございます。こっちのカズマには関係のない事なのに、私の我が儘を叶えてくれて。」
「別に関係ないって事は無いだろ。元々俺達のせいなのに何もしないってのはちょっと筋違いだろうしな。それにアレだ。向こうの俺の気持ちを考えたら手伝わないと気が済まないからな。」
　なにせ自分の嫁が朝起きたら行方不明になっているのだ。早く手を打たないと、正直自分でも何をしでかすか分からん。
「・・・やっぱりカズマは何だかんだ言いながらも優しいですね。結局、こっちのカズマにも助けられました。」
「い、いや、別に助けたって程でもないだろ。当たり前の事をしただけだ。」
　そう、別にこれは当たり前の事の筈だ。俺達が勝手に呼び出したん

だから手伝うのは当然だろう。寧ろそうしなければ色々とマズいだろう。
「いえ、最初は確かに少々混乱しましたが、今は結構楽しんでいますよ？向こうとは少し違う人達、スキル、歴史。恐らく向こうでは誰一人知る事が出来ないであろう可能性の一つを知る事が出来たのですから。ですからこっちのカズマ達には感謝すらしています。勿論、勝手に呼んで、帰し方が分からないなんて言われた事は怒っていますよ？けど、その事に関してはこうしてエリス様に会わせてくれて、説得を手伝ってくれた事でチャラです。私一人ではまず説得までの過程で手間取ったでしょうし。」
「そうか？正直大人めぐみんだけでもなんとかなったと思うんだけどな。」
「ですが、時間の短縮や、向こうの皆への状況報告はカズマが居たから出来たんですよ？私だけではきっと無理でした。本当にありがとうございます。」
「あー、それはアレだ。迷惑料として受け取ってくれればいい。大した事はしていない。」
そう言うと、大人めぐみんはクスリと笑い、何でもないように呟いた。

「貴方のそういう所も、大好きですよ。」

「もう一回言って下さい。今度は耳元辺りで。」
「本当に雰囲気をぶち壊すのが得意ですね貴方は!!」
しまった、あまりの衝撃と感動と気まずさからつい欲望が滲み出てしまった。
「いや待て、ちょっと選択肢ミスった！ていうかホラ、アレだ！コレって浮気とかになるんじゃないか!?ほら、同じ人物でもこんなの殆ど別人みたいなもんだし！」

「いいんですよ。向こうのカズマは私の召喚にも反応せずに熟睡してる薄情者です。これくらいの仕返しは当然でしょう。」
「え、そうなのか?まあ確かに隣の奥さんが助けを求めてんのに起きないってのは我ながらどうかと思うが・・・。」
「あ、いえ。あの時私は風呂場にいましたね。カズマは寝室でした。」
「それ理不尽だろ!?風呂場と寝室結構距離あるぞ!?」
「それでも声くらいは届きますよ!それなのに起きないカズマが悪いです!」
さっきまでの甘い雰囲気はどこへやら、俺と大人めぐみんは不毛な言い争いをしながら帰路についた。
少し損した気がするが、この方が俺達らしいような気もする。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「全く・・・あの後私がどれだけ危ない橋を渡ったと思っているんですか。上司どころか後輩にも見つからないように平行世界の私へ状況説明、そこからの交渉。成立したらそこから更に綿密な打ち合わせ。そしたら今度は平行世界に干渉した痕跡の抹消。これだけでもバレたら一体どれだけ降格されるか・・・。下手したら神格すら剥奪されますよ?」
余程鬱憤が溜まっていたのか、溢れるように愚痴が出てくるエリス。ここまで疲労の溜まった姿を見せつけられると流石に悪い事させたなと思う。
「本当にその辺はすいませんでした。あの、それで結局どうなりました?」
「・・・向こうの私に協力を取り付ける事は出来ました。今日から準備を始めれば恐らく三日程で元の世界に戻る事は出来ると思います。向こうは向こうでパニックを起こして色々しでかしたカズマさん達を止めるのに手間取ったらしいですから、昨日はロクに準備が出来な

かったんです。」
「お、おう・・・。一体何をやったのかが凄い気になるけど、まあこれで一安心って感じか。」
「どこがですか!!私はこれから三日間、ずっと休む暇なんて無くなるんですよ!?」
「すいません!今度何か埋め合わせしますから!」
全くもう・・・と言いながらも許してくれるエリス。本当にどこぞの駄女神に見習わせたい。
「ですが本当にありがとうございます。これで向こうのカズマ達にも余計な心配をかける事もなくなりました。」
「いいんですよ。元はと言えば神器の回収が遅れた私の責任でもあるのですから。」
そう言って頬の傷を掻きながら苦笑を浮かべるエリス。
しかし三日か。さっきまでは早く大人めぐみんを元の世界に帰さなければ、と思っていたが、そう聞くと大人めぐみんとの別れを名残惜しく感じる。我ながら面倒な性格しているなあと思う。
たった一日一緒にいただけで随分な入れ込みようだとは思うが、やはり俺を甘やかしてくれる美少女がいなくなるのは口惜しい。
「さて、それでは私はそろそろ準備に取りかかるとしましょう。」
「もう行くんですか?ここまでやってもらったんですから何か奢るくらいはしますよ?」
「いえ、いいんです。さっきはああ言いましたけど、こういった事をするのって結構ワクワクしますから。」
「悪い人ですね、エリス様。」
「貴方が言いますか。」
軽口を叩きながらテーブルから立つエリス。どうやら本当に行くようだ。今度会ったら絶対に何か奢ろう。
「それではめぐみんさん。あと三日間、この世界を堪能して下さいね。」
「ええ、本当にありがとうございます。」
最後に大人めぐみんに声をかけて、喫茶店から出て行った。これか

ら天界に戻って道を繋ぐ準備をするのだろう。
「・・・それじゃ、俺達も帰るか。」
「ええ、そうですね。」
今日のミッションはひとまず完了。大人めぐみんと一緒に俺達は屋敷に戻る事にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

カズマと一緒に屋敷に戻って、自分の部屋に入って、ベッドに倒れるようにダイブする。うつ伏せのままだと少し息苦しいので、ゴロンと寝返りをうった。
「・・・あと三日ですか・・・。」
ポツリ、と独り言を呟く。
この世界に来て、なんだかとても濃い時間を過ごした。まあ元の世界でも色々濃い時間を過ごしていた事が多かったので、今更思う事もないが。
突然平行世界なんて所に呼ばれ、別の可能性を辿った自分と仲間達との邂逅。帰り方が分からず、困った時の神頼みとしてエリス様の説得。もう一人の私と一緒にやった爆裂勝負。その勝負で自分の爆裂魔法の威力が著しく落ちていた事の判明。
昨日だけでこれである。たった一日でよくぞまあここまで事件が立て続けに起きるものだ。
「しかし・・・予想以上に向こうの世界と違いますね。」
昨日の夜、カズマ達に今までの冒険譚を聞いてみたのだが、自分達の冒険譚とあまりにも違う。
キャベツの収穫、街の弁償、カズマの国家転覆罪、バニルとの出会い、アルカンレティアへ向かう動機、紅魔族ローブの有無など、挙げていけばキリがない。
魔王軍幹部ですら違う者達が配属している。なんだデッドリーポ

イズンスライムのハンスって。・・・いや、私達が冒険を始める前に既に魔王軍幹部は一人倒されていたらしいから、もしかしたらそいつがハンスだったのかもしれない。
そして何より、私の爆裂魔法習得の状況。ちょむすけなる猫の存在。
・・・邪神、ウォルバク。
「・・・複雑な気分ですね、自分の全く知らない人物が、自分にとって掛け替えのない存在だったなんて。」
平行世界なのだ。所々違って当たり前、当然の事だろう。
だが―
自分の始まり、根っこの部分が全く知らない人物によって構成されていると聞いて。その人物の出会い、別れがとても衝撃的で。結末は感動的ですらあって。

―そんな話を聞いて、そんな物語（ストーリー）なんてない自分の方が、めぐみんの紛い物のような気分になった。

意味の無い被害妄想だと分かっている。恐らく向こうの皆と離れてセンチメンタルな気分になっているであろうことも。
それでも、不安な事には変わりない。
「・・・いけませんね。こんな状態では、こっちの皆に迷惑をかけてしまいます。」
ベッドから起き上がって両手で頬をパンッと叩く。少し強く叩きすぎたのか、結構ヒリヒリと痛むが別に問題ない。ちょっと涙が滲んだ程度だ。
エリス様も言っていたではないか。この世界を堪能しておけと。
どうせ三日後には帰るのだ。それまでにうんと楽しもう。
「しかしまさかこの私が一人が寂しくて不安、だなんて自分でも驚きですね。もっとドライな性格だと自負していたのですが。」
まあ当然といえば当然か。一緒に居ると楽しい、と思える仲間達とずっと一緒にいたのだ。これくらいの反動は当たり前だろう。

それに、愛し合うという事を体験した時点で私は十分寂しがりになったのであろう。愛する人が側に居ないだけでこんなにも不安定になるなんて、いよいよヤンデレに片足突っ込んでいる。そのうち彼の側にいないと禁断症状がでるなんて事になるのだろうか。そんな事になったらずっと彼とくっついてなければいけないが。

・・・まあそんな退廃的な日々を過ごすのも、それはそれで悪くないかもしれない

そんな取り留めのない事を考えながら、私はリビングへと向かった。

これから始まるのは、私にとっての異世界ライフ。その一端である。

この始まりの日に終止符を！

私の名はエリス。この世界で女神をやっている者です。
それは魔王が討伐されて早くも半年の時が流れ、今日も今日とてこの世界を見守ろうと思い、盗賊クリスとして活動を開始しようと思っていたある日の事―

「・・・という訳で、共に平行世界の道を作ってくれませんか？」
「本当にカズマ君達は一体何してんのさあああぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

―別世界の私に、犯罪の片棒を担いでくれと頼まれました。
なんでも平行世界のカズマさん達が転生者の残した神器を使い、此方の世界のめぐみんさんを召喚してしまったという話でした。
もう既に昼頃。此方のカズマさん達がパニックを起こし始めても可笑しくありません。
「というかそっちの私も私だよ！どうしてそんな神器を放っておいたのさ！」
「その点は本当にすみません・・・。地上に残された神器の中では比較的安全だったので、回収は後回しでも良いと思って・・・。」
申し訳なさそうに謝る向こうの私。まあそれもそうだ。幾ら望んだ使い魔を呼べるといっても、それは主人の実力次第。生半可な魔力ではロクな使い魔など呼べない。アレはそういう神器なのだから。
しかし困りました。異世界に飛んだならまだギリギリ規定に引っかからずに呼べる可能性がありましたが、よりにもよって平行世界。完全にアウトです。
異世界なら多少人と触れ合ったり会話をしたり、場合によっては技術を教えたりしても問題ないのですが、平行世界は少しの情報も行き来してはならない。それはその平行世界の未来を大きく変えてしまうから。それはつまり平行世界の意義をなくす事に他ならない。
違う可能性を辿ったから平行世界なのだ。その行き来した情報によって同じ可能性を辿ったら平行世界の意味がない。そういう考え

が浸透し、平行世界の行き来は天界規定により禁止されています。
・・・だが飛ばされたのがよりにもよって私の知り合い。それも魔王を倒し、この世界を救った・・・救った？・・・ま、まあ兎も角、魔王を倒した人物の妻である。もしこのまま向こうの私に手を貸さず、めぐみんさんが帰ってこなかったら、その人物が天界に対してカチコミでもしかねない。
なにせ死後の世界をテレポート先に登録する人だ。その上女神である先輩まで付いている。正直何をしでかすか分かったものじゃない。
「・・・あああぁぁぁあああもおおぉぉぉぉぉぉぉ!!!!分かったよ!!けどやるなら徹底的にだよ!!少しでもバレる可能性があったらすぐに中止するからね!!」
「すみません！本当にありがとうございます！」
悩みに悩んだ末に、私は共犯者になる選択をした。
そもそもの話、このまま放っておいてもそう遠くない内にカズマさんが私に相談しにくるのが目に見えている。そうなったら結局何だかんだあの人達に協力する事になるのだろう。だったら最初から手を貸した方が余計な手間もかからない。
そうと決まれば早く準備を進めた方がいい。焦ってヘマをしてはいけないが、長引けば長引く程天界の人達にバレる可能性が高い。
「それじゃあとりあえずどういう手順で進めるかを決めよっか。まずは・・・。」
「あっ。その前にそちらのカズマさん達に今の状況を伝えてもらってもいいでしょうか？」
「っと、そうだね。多分しばらく経ったらやってくるとは思うけど、早く伝えたら余計な被害も出ないだろうし。」
「・・・？やってくる・・・？」
「あー、気にしないで。こっちの話。」
この反応からすると、どうやら向こうの世界はまだ此方程状況が進んでいないようだ。まあわざわざ罪状を増やす理由も無いので伝えるつもりも無いが。

しかし向こうの私の言う通り、先にカズマさん達に情報提供をしておいた方がいいだろう。そうすれば街中を大騒ぎさせる事も無いだろうし。

そう思い、一度向こうの私に断りを入れてから私はクリスとして地上に降り立った。

もう既に手遅れになっているとも知らずに。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

地上に降りて、早速アクセルの街にあるカズマさん達の屋敷にやってきた私を迎えたのは・・・

「ダメだ！警察や守衛の者達に聞いたが見ていないと言っていた！」
「こっちもダメ！アルカンレティアでも見かけなかったって！」
「クソッ！そっちもか！俺もギルドに行ったがハズレだった！」
「こ、紅魔の里にもいませんでした！ああ・・・や、やっぱりめぐみん、誘拐されちゃったんでしょうか・・・!?」
「馬鹿！滅多な事言うなよ！畜生、どこ行ったんだアイツ!!バニルの奴に聞いても急にめぐみんの居場所が見通せなくなったとか言うし！」

・・・とってもカオスな光景でした。

反射的に扉を閉めてしまった私は悪くない筈。

「・・・遅かったかー・・・。」

思わず諦観の台詞が零れる。今の状況を見る限り、もう街中どころかアルカンレティア、紅魔の里にまでめぐみんさんの失踪は知れ渡っ

ているだろう。もしかしたら王都もかもしれない。
だがしかし、なってしまったものは仕方ない。早くカズマさん達にこの事を知らせて事態の沈静化を図るとでも・・・
「クソッ、次だ！ゆんゆん、別荘までテレポートを頼む！」
「は、はい！カズマさん、離れないで下さいね！」

・・・ん？別荘？

「え、まさか!?ち、ちょっと待っ・・・！」
「『テレポート！』」
慌てて扉を開け、引き止めようとした瞬間にカズマさんとゆんゆんさんがテレポートで転移する。
・・・しまったあぁぁぁぁ!!よりにもよって一番面倒なところに飛ばれたあぁぁ!!
「あ！クリスじゃない！丁度良かったわ！今ね、大変な事が起こっているの！」
「知ってるよもおおおおお!!だから伝えに来たのに何でカズマ君テレポートしちゃうかな！」
「何!?おいクリス！まさかめぐみんの失踪について何か知っているのか!?」
「ごめん、後で説明するから！カズマ君、別荘に飛んだんだよね!?ちょっと行ってくる！」
騒ぐ二人を置いて急いで街の外に向かう。行き先があそこならテレポート屋に行っても時間がかかる。だから一回天界に戻ってあそこの近くに降り立つ必要がある。
ああ、何でカズマさん達が絡むと毎度こんなに慌ただしくなるのでしょうか・・・。
そんな事を思いながら、私は急いで天界に戻った。

・・・

「つ、着いた・・・。カズマ君、早まってなければいいけど・・・。」
十数分かけてカズマさんの別荘に到着したが、やはりテレポートに比べたら少し出遅れる。カズマさんは恐らくもう既に『彼等』の所に居るだろう。
変なトラブル起こしてなければいいなーと思いながら私は別荘の扉を開けた。

「オラァ!!お前らが何かしたんじゃねえのか!?今のところ一番怪しいのはお前らなんだよ!めぐみんに色々恨み持ってそうで誘拐なんてしそうなの!正直に答えないとまた爆裂魔法叩き込まれる日々を送らせるぞ!言っておくがまだ我が家にはマナタイトが山ほどあるんだからな!!」
「だから知らねえって言ってんだろ!!誰がそんな恐ろしい事するか!!お前ウチの姫様なんてあの日々が完全にトラウマになってんだからな!?今でも偶に『こうして一庶民として過ごすのも悪くないわね・・・あんな地獄の毎日に比べたら素晴らしいとしか言えないわ・・・』なんて事黄昏ながら呟くんだぞ!?」
「そもそもあの頭のおかしい小娘にそんな真似したらお前らが何するか分かったもんじゃないだろうが!もうウチはお前ら冒険者や王都の騎士達の総攻撃に耐えれない位までバラけてんだからな!」

そこには予想した通り、カズマさんとかつて魔王軍に所属していた魔物達が言い争いをしていた。
「・・・どうやら今度はギリギリセーフだったみたいだね。」
この光景を見てセーフと思える辺り、私も大分カズマさん達に毒されてきたと思う。

何故カズマさん達の別荘に魔王軍の魔物達が居るのか、それは単純明解。

そう。何を隠そうカズマさん達の別荘とはあの魔王城なのだ。

事の発端はカズマさんが魔王を倒して2ヶ月程経った頃に、めぐみんさんの1日1爆裂が魔王城に撃ち込まれている事がカズマさんに知られた時でした。

何でも例の最高級マナタイトの山を貰ったお返しに魔王城を制圧して渡そうとしたとの事です。

初めの時こそ激怒したカズマさんでしたが、その頃には既にめぐみんさんと結構良い雰囲気だったのでめぐみんさんが

『カズマに迷惑を掛けたのは本当に悪いと思っています。ですがあれほど素敵なプレゼントを貰ったのに中途半端なお返しでは私の気が収まらなくて・・・。私が出来る限りでの最高の贈り物を渡したかったんです。ダメ、ですか・・・?』

と、上目遣いで言って一瞬で決着がつきました。

その後、魔王城の制圧にカズマさんも手を貸し、二人掛かりで魔王軍にプレッシャーを掛け、その結果、めぐみんさんの爆裂魔法とカズマさんによる交渉と言う名の脅しによって魔王軍は泣く泣く城を明け渡す事になりました。

最低条件として城の一部を使わせてくれと懇願する元魔王軍はなんだか少し憐れに感じました。

まあ何にせよ間に合って良かった。もしこれでまた何かトラブルが続けばどうなっていたか・・・

「ああもうメンドくせえ!とりあえずおたくの姫さんに会わせろ!目の前で爆裂魔法の光を直接見せりゃあ正直に答えてくれるだろうよ!」

「ようしカズマ君ちょっと落ち着こうか!というか落ち着いて下さいお願いしますから!」

本当に間に合って良かった!!

・・・

もっと言えば結婚する可能性が低くなる訳で。
・・・うん、魔王攻略の話はしないでおこう。
となれば未来の話はぼかしつつ、カズマの言う差違を中心的に話すとしましょうかね。
「そうですねぇ・・・向こうの世界では最初の荒稼ぎはキャベツ狩りではなく、宝島でした。」
「宝島？なんだそりゃ？」
「玄武という名の十年に一度現れるという超弩級の大亀です。あれほど巨大な生物も存在しないでしょう。何せデストロイヤーと同等レベルですからね。」
「・・・アレと同等レベルって考えたくないな・・・。」
カズマが露骨に嫌そうな顔をする。まあ確かにそんなサイズのモンスターと戦うと聞いたら私だってそんな顔をするだろう。
「まあデストロイヤーと違い、人を襲ったという話は聞きませんね。それでその玄武は普段は地中深くに潜っているのでその甲羅には希少な鉱石が沢山引っ付いているんです。なのでその背中にある大量の鉱石を求めて冒険者達がこぞって集まるんです。」
「成る程、その鉱石を売り払うなり加工するなりして冒険者達は懐や装備を潤しているって訳か。」
「だがそれならキャベツ狩りよりも余程儲かるのではないか？キャベツ達は襲ってくるがそっちではただ採掘してるだけなのだろう？」
ダクネスが少し残念そんな顔をして聞いてくる。『そっちの私は袋叩きにされなくて可哀想・・・』という想いがハッキリ伝わって少し悲しくなった。
「いえ、そうは問屋が卸しません。玄武自体は敵対行動をとる事はありませんが、その背中には他の鉱石に紛れて鉱石モドキというモンスターが引っ付いているので、間違えて鉱石モドキを叩いてしまうとそいつらが襲ってきます。近くの冒険者達を巻き込んで。」
「なんて傍迷惑な・・・。」
「ま、私が近くに居ればその鉱石モドキとやらが暴れる前に華麗に倒して助けてあげたに決まっているでしょうけどね！」

「へー。・・・それで大人めぐみん、実際のところは？」
「・・・ええっと、私はその時ダクネスと一緒に掘っていたので直接は見てないんですけど、後でカズマに聞いたところアクアはお金持ちになるため、ウィズは赤字を取り戻すために周りは気にせず兎に角がむしゃらに掘り続けたみたいです。」
「おいこの自称なんとかさんよ。お前は向こうの世界でも自称なんとかさんだったらしいぞ？」
「嘘よ！そんなの嘘に決まっているじゃない！大人めぐみんったらカズマに騙されているんだわ！純情な大人めぐみんを騙すなんてとんだクズね！ほら謝って！大人めぐみんに嘘をついた事と私をコケにした事を謝って！」
「てんめえいい加減にしろよこのクソビッチが!!自分の非を認めないどころか俺に擦り付けるってどういう了見だコラ!!」
取っ組み合いを始めたカズマとアクアを見つつ、あの頃の事を思い出す。
正直なところ彼が宝島に向かって爆裂魔法を打ち込めと言ってきた時は彼の正気を疑いました。今なら最高級マナタイトを幾つか持っていれば宝島だろうと倒せる自信はあるが、あの時の私はまだ未熟も未熟。圧倒的に火力が足りないのだ。
私があの時彼の言うことを聞いたのは宝島が人を襲わないという事実を知っていた事に他ならない。もしそうではなかったら絶対に拒否していた。間違いなく。ですがそのお陰で報酬も増えたし、宝島も満足そうにしていたので良かったと思います。
随分と危ない橋を渡ったなあと物思いに耽っているとカズマ達の方は決着がついたようだ。多様なスキルと策を駆使して見事カズマが勝ったようだ。アクアが泣かされているという非常に見慣れた光景がそこにある。まあダクネスを盾に使わなかったらそりゃあカズマが勝ちますよね。
「あとはそうですねぇ・・・紅魔族ローブの有無でしょうか。」
「紅魔族ローブ？なんですかそれは？」
「向こうの紅魔族は此方と違い、魔力の自然放出が非常に下手なんで

す。ですから放っておいたら体が溜まった魔力に耐えきれず、『ボンッ』ってなります。」
「「怖っ!?」」
「それを防ぐ為に体内の魔力を自然と吸い出し、放出する機能を付けたローブを向こうの紅魔族は皆持っています。」
「それが紅魔族ローブということか。」
「はい。私もいつも着ているのですが、ある日私の紅魔族ローブが使い物にならない事件が起こったので向こうのカズマ達と一緒に紅魔の里に行く事になりました。」
「へえ、一体何があったんだ?」
「・・・まあ、その、色々と。」
流石にあの出来事まで言う気にはならない。別に誰にも知られたくないという程ではないが、だからといって知ってほしいという訳ではないのだ。
だがそんな私の様子を見てカズマが若干不審そうにして聞いてくる。
「どうしたんだよ。急に歯切れが悪くなったぞ?」
「いえ、その、少し恥ずかしい事があったので。」
「・・・ほほーう。」
あ、カズマが何か企んだような顔をした。
と、そこでカズマが何やら他のメンバーを集めて話をし始めた。

「・・・おい、お前ら。明日ウィズの店にもっかい行って仲良くなる水晶持ってくるぞ。」
「え?それってあの魔力を注いだら黒歴史が投影されるアレ?」
「おう。お前らも大人めぐみんの詳しい過去、知りたくないか?」
「い、いや待て!流石にそれは不味くないか?アレを故意に使わせるのは少し気が引けるというか・・・。」
「大丈夫だ。流石にコレ以上はヤバいと思ったらすぐに止めさせる。」
「いやそういう問題では無くてな!?めぐみんもいいのか!?このままで

はまた恥ずかしい過去が公開されるのだぞ!?」
「いえ、あの時は少し取り乱してしまいましたが、今では皆既に私の恥ずかしい過去を知っていますから正直それ程抵抗はありませんね。それより向こうの私がどのような黒歴史を構築したのかが気になります。」
「いいのかそんな大雑把で!?」

・・・会話は聞き取れないがろくでもない話をしているのは分かった。
それからもカズマ達と話を続けていく。夜はまだまだ終わらない。

・・・

う。
　というか私がこんなスタイルなのは環境が原因に決まっています。私だってもう少しキチンとまともな食生活が出来ていれば皆が羨む抜群のプロポーションが手に入った筈なんです。決して遺伝のせいではないですとも。
　そして何故彼女と私がこんな密会の真似事なんてしているのかは、今朝彼女があの人と一緒に出掛けた事が切欠だ。
　昨日に引き続き今日もあの人にベッタリくっついていた未来の私・・・通称『大人めぐみん』。
　いくら未来の自分自身といえど、自分が好意を抱いている男といつまでも一緒にいるのを見ると流石に危機感が沸いてくる。そもそも彼女はあの人と実際に結婚まで漕ぎ着けたのだ。あの人が彼女に惚れたって可笑しくない。
　そういう訳で彼女への警戒を強めつつ二人を引き離す、ないし監視の為に一緒についていくつもりだったが・・・。

『あ、それでは今晩どうやって私がカズマを落としたのか教えましょうか？きっと貴女の役にも立つと思うのですが。』
『是非ともお願いします。』

　とまあ、気がついたら彼女と私に結束の力が働きました。
　まあそもそも？彼女が滞在するのは3日だけの話らしいですし？仮にあの人が彼女に惹かれたとしてもそれは未来の私に惹かれたも同然ですから寧ろ私のアドバンテージが増えただけの事ですから別に警戒する必要性もありませんからね？
　決して私がチョロい訳ではありませんとも。ええ。
　そんな事を考えていると彼女が口を開く。
「ええ。私もこういう話は願ってもいないチャンスですからね。じっくり語ろうじゃないですか。」
「・・・？願ってもいないチャンス？どういうことですか？」
「例え平行世界の自分の事だとしても、彼の一番は『めぐみん』であっ

て欲しいですから。」
彼女の発言に少し疑問が出てくる。
あの人の一番？事実彼女と平行世界のあの人は結婚しているのだからそれは彼女が一番という事ではないのか？
そんな疑問が顔に出ていたのか、彼女が付け足すように言う。
「っとああ、今の私が言った一番というのは順位的な意味ではなく、順番的な意味です。」
「・・・ええっと、つまり・・・カズマが一番好きなのは貴女ですけど、他の出来事で他の女性に何かしら遅れをとった・・・という事でしょうか？」
「流石は私ですね。まさしくその通りです。」
どうやら正解のようだ。しかしどういう事だろう。一体何の遅れをとったというのだろうか。
考えられるのは・・・アプローチだろうか？
「結論から言えばダクネスにカズマのファーストキスを奪われました。」
「詳しく。」
あの変態何をした!!

・・・

サービスしてやるべきだろうが流石にそれは看過出来ない。
どうしましょうか。そんな話を聞いたらもうとっとと一線を越えた方がいいような気もします。いやだけど流石に3日も経たずにあの人の部屋に行って『あのお姉さんの事はもう気にしてないので抱いて下さい』なんて事言うのはどっちに対しても失礼でしょうし。
・・・いえ、失礼なのはお姉さんの方だけですね。あの人は普通に襲いそうです。
「後はそうですね・・・私が紅魔の里でカズマと一線を越えかけた時の話でもしましょうか。」
「是非！是非ともお願いします!!」
まあその辺の対策は追々考えましょう。今はもっと情報を得る為にも彼女の話をもっと聞くべきだ。
この後、彼女から滅茶苦茶有意義な話を聞いた。